9 紫黒米品種「むらさきの舞」栽培上のポイント

ねらいと成果

赤い日本酒を作るために育成した「むらさきの舞」は、2002年9月4日にうるち種の紫黒米として全国で初めて、種苗法により品種登録された。

玄米の表面に含まれるアントシアニン色素は、機能性（視力の改善、ガンの抑止等）があるといわれ、食用米や加工原料としても注目されている。そのため、栽培希望者からの問い合わせも多い。そこで、安定生産のため、栽培条件を変えて試験した結果、6月中旬植え、栽植密度は18～20株／㎡、やや減肥栽培が適することが明らかになった。

内 容

(1)作 期

作期の違いが収量・品質へ及ぼす影響を検討した結果、移植日が遅くなるほど、稈長が短く、全重、粗玄米重および千粒重は減じた。しかし品質面からは、移植日が遅い方が色素含量も高くなり（色差計による表面色：L値が低いほど色素含量が高い）、粒厚分布のばらつきが小さくなる傾向を認め、整粒歩合も明らかに高くなった（表）。「むらさきの舞」の栽培は、色素含量を高めることが重要であるが、収量、品質両面から考察すると、県南部では6月中旬に移植するのが望ましい。

(2)栽植密度

栽植密度（15.6～20.8株／㎡）を変えて、色素含量や収量を調査したところ、大きな差は認められなかった。分げつしにくい穂重型の品種なので、安定生産のためには栽植密度は多めの18～20株／㎡程度が良いと思われる。

(3)施肥法

肥料の種類（有機・化成・肥効調整型）や施用量（窒素施肥量 4～8kg/10a）による色素含量への影響は明らかでなかった。多肥栽培は倒伏しやすくなるので、窒素施肥量は基肥4kg/10a、穂肥2kg/10aが標準となる。

(4)収穫適期

「むらさきの舞」の登熟は、モミの色が緑色→黒緑色→黒色→黄土色（成熟籾）と進行する。収穫適期は、一般のうるち米とは異なり、未熟籾率が40%（黒緑色の籾が10%、黒色の籾が30%）で、成熟籾（黄土色）率が60%の時点とした（ひょうごの農林水産技術No.121(2002)参照）。作期により登熟日数は41～49日となるが、登熟までの積算気温は1000～1050℃が、成熟期の判定の目安となる。

普及上の注意事項

① 一般米に混入しないように、周辺ほ場への交雑などに留意し、育苗・移植・収穫・乾燥作業に注意する。

②2003年度から「むらさきの舞」の種子は、兵庫西農協揖龍中央経済センターで取り扱う。

③兵庫県の産地品種銘柄となっているので、検査を受けると品種名「むらさきの舞」が表示できる。等級は紫黒米の検査基準がないので規格外となる。

三好 昭宏（農業技セ・作物部・酒米試験地）

表 作期の違いによる生育・収量および玄米表面色（色素量）

	移植日 月日	出穂期 月日	成熟期 月日	稈長 cm	穂長 cm	穂数 本/㎡	全重 kg/a	粗玄米重 kg/a	同左指数	千粒重 g	整粒歩合 %	色差計測定値 L値	a値	b値
作期Ⅰ	6／4	8／15	9／25	109	22.1	331	163	45.0	100	26.1	86.5	18.6	3.7	1.6
作期Ⅱ	6／14	8／18	10／2	106	23.0	270	144	44.1	98	25.5	87.2	17.7	4.0	1.4
作期Ⅲ	6／25	9／3	10／21	106	22.6	312	149	42.6	95	25.1	92.0	17.6	3.7	1.1